

モモ新品種 ‘夢みずき’

新谷勝広・竹腰 優・雨宮秀仁・佐藤明子¹・三宅正則・猪股雅人・手塚誉裕・富田 晃

¹ 現 山梨県農政部農業技術課

キーワード：モモ，早生品種，夢みずき

緒言

山梨県果樹試験場では 1988 年より本格的に白肉普通モモの交雑育種を開始し，これまでに‘日川白鳳’と‘白鳳’の間に収穫できる‘夢しずく’と極早生で‘ちよひめ’より数日早く収穫できる‘ひめっこ’の 2 品種を育成した^{1,2)}。

山梨県においては，‘白鳳’より早く成熟するモモ品種の収穫時期がしばしば梅雨と重なるため，果実の食味低下や着色不良が問題となることがある。特に‘夢しずく’と‘白鳳’の間には優良な品種が少ないため，梅雨期でも食味と着色が良好な栽培性に優れる品種の開発が望まれている。

そこで山梨県果樹試験場では，梅雨期でも食味が安定し，着色性に優れる生食用白肉普通モモの品種の開発を行ってきた。

その結果，果実品質，着色性ともに優れる白肉系統として‘モモ山梨 13 号’を選抜し，2011 年に品種名‘夢みずき’として品種登録を申請し，2013 年に品種登録された(登録番号第 22, 586 号)。

ここにその育成経過と特性について報告する。

育成経過

‘夢みずき’は，山梨県の中生種の主力であり大玉で食味に優れる‘浅間白桃’を種子親とし，無袋で栽培でき着色性に優れ食味良好な早生品種‘暁星’を花粉親として交雑し育成した(第 1 図)。

交雑は 2000 年に山梨県果樹試験場圃場(山梨市江曾原)で行った。得られた種子はただちに除核

し滅菌シャーレに入れ 4℃の恒温器で 3 ヶ月間貯蔵後に播種し，ガラス温室内で養成した。2001 年 4 月からは苗圃に移植し，2001 年 12 月に個体番号‘12-19’を付して選抜圃場に定植した。2007 年に一次選抜し系統名‘モモ山梨 13 号’とした。その後，着色容易で，果実重や糖度などの果実品質が優れることから 2010 年に二次選抜した。

2011 年，‘白鳳’より 3 日程度前に収穫でき，糖度が安定し，着色の良い有望な系統であると認められ，品種登録の申請を行った。2012 年 3 月に出願公表され，2013 年 6 月に‘夢みずき’として品種登録された。

品種名の由来は，夢のようにみずみずしい美味しいモモをイメージしたものである。

品種の育成に関与した担当者および担当期間は次のとおりである。櫻井健雄(2000～2002)，手塚誉裕(2000～2002)，雨宮秀仁(2000～2008)，飯島光夫(2000～2002, 2007～2011)，富田 晃(2003)，竹下政春(2003～2006)，猪股雅人(2004～2006)，佐藤明子(2004～2009)，三宅正則(2007～2009)，新谷勝広(2009～2011)，竹腰 優(2011)。

特性の概要

2003 年から 2011 年までの 9 年間，‘夢みずき’の樹体特性および果実形質を原木および 2008 年に切り接ぎで接木した複製樹 2 本を用いて調査した。‘夢しずく’と‘白鳳’を対照品種とし，‘夢しずく’は 2001 年に芽接ぎにより増殖した樹で



第1図 モモ‘夢みずき’の系統図

‘白鳳’は1998年に同じく芽接ぎにより増殖した樹で調査を行った。

1. 樹体特性

樹体特性に関する調査結果を第1表および第2表に示した。樹姿は‘夢しずく’、‘白鳳’が中間であったのに対して、‘夢みずき’は斜上であり、樹勢は対照品種と同様で中である(第2図)。新梢の発生は多く、節間長は中、葉の色は緑である。蜜腺の形は‘夢しずく’、‘白鳳’は球腎であるのに対し、‘夢みずき’は腎臓形であった。花芽の着き方は複である。花は普通咲きで、花冠の表面の色は淡桃、花弁の形は狭楕円形、花弁の大きさは

中である。育成地での満開期は4月12日で‘夢しずく’より3日遅く、‘白鳳’とほぼ同時期である。花粉を有し、自家結実性で、生理落果は少ない。育成地における収穫期は7月中旬から7月下旬、満開後日数では97日であり、‘夢しずく’より5日程度後、‘白鳳’より3日程度前であった。せん孔細菌病、灰星病には罹病性であるが、通常の薬剤防除により病害はほとんど発生しない。

2. 果実特性

果実特性および果実品質に関する調査結果を第2表、第3表に示した。果実重は350g前後で、‘夢しずく’と同程度、‘白鳳’より40g程度大きい。果形は扁円形で、果頂部は広く浅く凹む(第3図)。

第1表 ‘夢みずき’の樹体特性

品種名	樹姿	樹の大きさ	樹勢	花芽の付き方	がく筒内側の色	花冠の表面の色	花弁の形	花粉の有無	蜜腺の形	満開期	収穫始期	成熟日数
夢みずき	斜上	中	中	複	緑黄	淡桃	狭楕円形	有	腎臓	4/11	7/17	97
夢しずく	中	中	中	複	やや鮭肉	淡桃	やや楕円	無	球腎	4/9	7/12	94
白鳳	中	中	中	複	黄	淡桃	楕円	有	球腎	4/12	7/19	99

第2表 ‘夢みずき’の果実特性

品種名	果実の形	果頂部の形	梗あいの深さ	果実の地色	着色の型	果皮の付着性	果肉色	生理落果
夢みずき	扁円	広浅凹	浅	乳白	ぼかし	弱	乳白	少
夢しずく	扁円	凹	深	緑黄	条~ぼかし	易	白	少
白鳳	円	凹	浅	乳白	ぼかし	易	乳白	少

第3表 ‘夢みずき’ の果実品質

品種名	調査樹齡 (年)	果実重 (g)	硬度 (kg)	糖度 (°Brix)	酸度 (pH)
夢みずき	9~11	348.8	2.0	14.9	5.0
夢しずく	8~10	355.0	2.2	13.5	4.8
白鳳	11~13	319.1	2.1	13.7	4.7

数値は2009~2011年までの3カ年の平均値
いずれの品種も有袋果（二重袋）の値



第2図 ‘夢みずき’ の樹姿



第3図 ‘夢みずき’ の果実



第4図 ‘夢みずき’ の切断面



第5図 ‘夢みずき’ の結果状況

果形の特徴として縫合線と反対側の果頂部がやや盛り上がる, 果梗部がやや四角くなる, ややいびつな形状となりやすい. 果皮は地色が乳白で着色はぼかし状で着色面積はやや大である. 裂果には至らないが, 果面に微細な果点が目立つ場合があ

る. 果肉は乳白色で, 果皮直下のアントシアニン着色は強, 果肉および核周囲のアントシアニン着色は弱である (第4図, 第5図). 肉質は溶質で, 粗密は中である. 果肉繊維が少なく, 多汁で肉質は良好である. 甘味は多く, 果汁の糖度は14.9°

Brix で, ‘夢しずく’ より 1.4° Brix, ‘白鳳’ より 1.2° Brix 高かった. 酸味は少なく, pH で 5.0 程度となり ‘夢しずく’, ‘白鳳’ より酸味が少ない. 渋味の発生は少なく食味は優れる. 核は粘核で大きさは中, 核割れの発生は中である.

3. 栽培上の留意点

‘白鳳’の前に収穫できる高品質な品種として県内の早場産地から遅場産地まで栽培可能であると考えられる. 樹冠上部など日当たりの良い部位には果皮に果点が多く発生するため, 有袋を基本として栽培する. また, 果皮直下のアントシニン着色が強いため, 果皮から果肉にかけて紅色素が多く入る. しかし, 紅色素が多く入ることによる糖度や日持ち性の低下は観察されていない.

花芽の着生が多く花粉も有しているため結実は良好である. 果実が大きいため, 着果過多とならないよう適切な摘蕾や摘果などの着果管理を実施する (第 5 図). 外果皮の着色が多いため, 除袋後の着色管理では過剰着色にならないよう注意する. 年によっては収穫期後半に果肉障害の発生が認められることがあるので, 硬度を重視した適期収穫に努める.

摘 要

‘夢みずき’は, 2000 年に ‘浅間白桃’ に ‘暁星’ を交雑して育成した品種である. 2007 年に一次選抜を行い, ‘モモ山梨 13 号’ と系統番号を付けた. 2010 年に二次選抜し, 栽培性, 果実品質ともに優れていたことから, 2011 年に品種登録の申請を行い, 2013 年 ‘夢みずき’ として登録 (登録番号第 22, 586 号) された.

収穫期は育成地の山梨市江曾原 (標高 440 m) において, 7 月中下旬で, ‘夢しずく’ より 5 日程度後, ‘白鳳’ より 3 日程度前である. 果実は扁円形で, 350 g 前後と大きいが, 果形はややいびつな形状となる. 糖度が 14.9° Brix と高く, 酸度が低いことから食味は良い. 着色は良好であるが, 樹冠上部の果実には果点の発生が目立つため有袋栽培を基本とする.

引用文献

- 1) 手塚誉裕・雨宮秀仁・櫻井健雄・猪股雅人・富田晃・菊島昭子 (2006). モモ新品種 ‘夢しずく’. 山梨果試研報. 11:11-17.
- 2) 三宅正則・新谷勝広・竹腰 優・雨宮秀仁・佐藤明子・猪股雅人 (2013) モモ新品種 ‘ひめっこ’. 山梨果試研報. 園学研 10 別 2, 11

New Peach Cultivar ‘Yumemizuki’

Katsuhiro SHINYA, Yu TAKEKOSHI, Hidehito AMEMIYA, Akiko SATO¹,
Masanori MIYAKE, Masato INOMATA, Takahiro TEZUKA and Akira TOMITA

Yamanashi Fruit Tree Experiment Station, 1204 Ezohara, Yamanashi-shi, 405-0043, Japan

Current address:

¹Yamanashi Agricultural Department, Marunouchi, Kofu, Japan

Summary

‘Yumemizuki’ resulted from a cross of ‘Asamahakuto’ and ‘Gyosei’ made in 2000. Since the nature of cultivation and fruit quality were superior when the secondary selection has held in 2010, the cultivar has applied in 2011, registered as ‘Yumemizuki (registration No.22,586)’ in 2013. The harvest time is in the middle to the last of July at in Ezohara, Yamanashi-city; an altitude of 440 m, and is about five days later than ‘Yumeshizuku’, and three days earlier than ‘Hakuho’. The fruit is oblate that is large as weighted around 350 g, however it is a little misshapen. It is flavorful because its sugar content is high as 14.9 ° Brix, and acidity is low. Cultivation with paper bagging is fundamental so that dots occur on fruits at the top of canopy stand out.